

優しさを行動に

東京消防庁 消防総監

小 宮 多喜次

昨年1月17日に発生した阪神・淡路大震災は、死者6,000人以上、家屋の全半壊20万棟以上、被害総額6,000億円にも達するとされる未曾有の大災害でした。

東京消防庁は、発災直後支援本部を設置し、応援隊としてヘリコプターをはじめ、延べ400台あまりの車両と2,700余名の人員を派遣し、救助、救急、消火等の活動にあたりました。

私も現地の激励を兼ねて被害状況を見てまいりましたが、想像以上の被害の大きさ、悲惨さに胸が痛みました。

日に日に拡大する被害規模、被災者の痛ましい状況を伝えるマスコミ報道の中で、心暖まる思いをしたのが、ボランティアの方々の活躍を伝えるニュースでした。

発災直後には、多くの人々が単独で又は消防や警察に協力して救助活動や消火活動を行いました。その後においても、救援活動に被災地の内外から大勢の人々が続々とかけつけ、さまざまな活動を行い、その数は今までに200万人にも達するとも言われています。

新婚旅行用に貯めた資金を旅費と滞在費にあて、発災直後から被災地を歩きまわり、一人暮らしのお年寄りのリストを作成し続けるサラリーマンの姿、配られたおにぎり

が固くて食べられないというお年寄りの声を聞き、炊き出しを始めた女子大生の姿、また、仕事を辞めて現地に来て一年経った今でもプレハブ小屋に寝起きしてお年寄りの世話をして回る元工員の話など、数多くの例が新聞で紹介されていましたが、これら多くの人々をボランティア活動にかりたてたものは、「人の優しさ」と「愛情」であったと思います。

「人ごとではない」、「何か自分にできる事はないか」という思いが利害や打算を超えて自らの時間や労力、あるいは財産の一部を差し出すという「行動」になって現れたということでしょう。

これまで災害時のボランティア活動と言えば'89年に発生したロマプリータ地震や'94年に発生したノースリッジ地震災害における救援活動での活躍など、米国を中心とした海外での活躍が多く報道され、その組織的で見事な行動から「災害ボランティアはロスに学べ」と言われたものですが、この間に日本人の中にもボランティア精神は育っていたということだと思えます。

また、特徴の一つとして、ボランティア活動を行った人々の中に若者の姿が目立ったということがあげられます。海外のマスコミにも被災者が冷静に秩序ある行動をとっ

ていることを賞賛するとともに、若者が中心となってボランティア活動を行っていることを報じているものが多くありました。

これまでシラケ世代と言われていた人々が決して「優しさ」を持ちあわせていなかった訳ではなく、何もなかったからであって、この災害を機に本来持っていた彼らの「優しさ」が目覚めたと言えるのではないかと思います。

発災から一年が経過し、町の一部は昔の活気を取り戻しつつあるというものの、完全復興への道のりはまだまだ遠いものがあります。

昨年、「ボランティア元年」という言葉が生まれましたが、「他人を生かし、自分を生かすために何かをすべきである」というボランティアの基本的な考えと行動の輪は、どんどん広がって欲しいと思います。

人は皆他人に手を差し伸べる「優しさ」をもともと持っているのだと私は思っています。ただ、それを行動として表すことが日本人はあまり上手でないとと言われることが多かったことも確かです。このことから我が国に本当にボランティアが根づくかどうかは、むしろこれからが正念場であると言えるでしょう。

日本は世界でも有数の地震、台風、火山の噴火等、自然災害が多い国です。そして、これらの災害から人々の生命、身体、財産、そして生活を守る活動は行政だけで全てをできるものでは決してありません。むしろ小回りがきき、住民の声にじかに接し、きめ細かな活動をするという面では、ボランティア活動に期待せざるを得ない部分が大変大きいと言えましょう。

昨年来、私は災害支援における多くのボランティア活動の場面を現地で、あるいはマスコミ等で見聞きし、日本の社会にも災害時におけるボランティア活動が根づくさざしがあるとの思いを強くしました。

ただ、これらの活動も人々が何の連携もなく、それぞれの思いだけで活動するのは、せっかくの思いがカラ回りに終わってしまうことが多いものと思われます。平素の訓練と行政をはじめとする諸機関との連携があれば、もっともっと大きな成果が期待できるでしょう。

兵庫県をはじめ各自治体や民間団体でも災害時におけるボランティアの制度化を進めているところが増えていますが、東京消防庁でも昨年東京消防庁災害時支援ボランティア制度を発足させました。応急救護や救助・救急活動等の支援をしていただく方、さらには、消防設備、危険物施設あるいは火災調査等の予防関係の技術を持った方など、総数17,000名のボランティア希望者に登録していただき、定期的に訓練を行って震災時に対応していこうとするもので、すでに4,700名以上の方々に応募をいただいております。

災害はいつ発生するか分かりません。

「備えあれば憂いなし」の教えどおり、喉もと過ぎても決して熱さを忘れることなく、来るべき災害に備え、人の「優しさ」からの「行動」が大きな効果をあげられるよう期待するものであります。